報道資料

レオナルド・ダ・ヴィンチ 美の理想

LEONARDO da VINCI

e l'idea della bellezza

開催趣旨

《モナ・リザ》や《最後の晩餐》など世界の宝と言われる名画を残したレオナルド・ダ・ヴィンチ(1452−1519)の誕生から、来年で560年を迎えます。ダ・ヴィンチはイタリアのヴィンチ村に生まれ、フィレンツェで修業時代を過ごし、ミラノで絶頂期を迎えました。その後、さまざまな都市を転々とし、最後はフランス国王フランソワ1世に招かれ、アンボワーズ郊外で67年の生涯を閉じました。膨大な手稿を残す一方、現存する絵画はわずか十数点と限られています。しかし、その「美の世界」は彼の生きたルネサンス期の芸術家はもとより、現代にいたるまで多くの芸術家たちに多大な影響を及ぼしてきました。

その美はなぜルネサンス期の人々を引きつけ、現代の私たちまでも魅了するのでしょうか。本展では、ダ・ヴィンチ研究の世界的権威であるカルロ・ペドレッティ氏の名誉監修、ダ・ヴィンチ研究の第一人者であるアレッサンドロ・ヴェッツォージ氏の監修により、木島俊介氏を日本側監修に迎え、ダ・ヴィンチの創造した「美の理想」に迫ります。

世界各地から集めた日本初公開となるダ・ヴィンチの作品、ダ・ヴィンチと弟子による共作、弟子やレオナルド派と呼ばれる画家たちの作品、ダ・ヴィンチと同時代の画家たちの作品、書籍や資料など約80点を展示し、「万能の天才」の美の系譜を、日本で初めてご紹介します。

監修者メッセージ

ルネサンスにおいては人間の尺度で調和を生み出すという「美のイデア」が、その中核をなす概念でした。レオナルド・ダ・ヴィンチこそ、森羅万象に関する素描から技術的なデザインまで、その多面性ゆえに、ルネサンス文化の頂点に立つ主人公なのです。

レオナルドは絵画を「知的なもの」、哲学と科学の総合とも見なしていました。自然や自然に備わる形態、その数学的永遠の規則などの観察から出発し、世界を自らの芸術と美や創意によって修正していこうとする傾向がありました。彼が研究し「表現」したのは、人間の顔、「魂の動き」、比例、象徴、そして「大地」や機械の構造・理想都市の建築と人体のアナロジー(類比)でした。そして本展では、とりわけ彼が求めた女性美を分析します。

本展の展示作品には、有名美術館所蔵の著名な作品もあれば、専門家の間で美術史的な重要性が指摘されながらも彼らしか知らないような作品もあります。作品が今回初めて展示されることで、本展に携わる人々や多くの観衆にその存在を知っていただき、思索の対象としていただくことができるでしょう。また、「芸術論」、特にレオナルドの『絵画論』も取り上げます。レオナルドはその中で「人を魅了する調和」、「天使のような顔立ちの釣り合いのとれた美」、「完璧な美の形象化」を理論づけ、また絵画の力によってこそ、調和や美を「長きにわたり存続させる」ことができるという考えを示したのです。

監修：レオナルド・ダ・ヴィンチ理想博物館館長　アレッサンドロ・ヴェッツォージ

photo : Carlo Gianni

point 01

日本初公開の“ダ・ヴィンチ”作品

現存するものは十数点しかないといわれているダ・ヴィンチの絵画。その中から、《モナ・リザ》と同時期に描かれたとされる円熟期の傑作《ほつれ髪の女》(東京会場のみ)が初来日します。さらに、若き日の習作2点(3会場共通)も日本初公開します。

point 02

もう一つの《岩窟の聖母》を公開

ルーヴル美術館、ロンドン・ナショナル・ギャラリーにも所蔵される《岩窟の聖母》。ダ・ヴィンチとその弟子によるとされるもう一つの《岩窟の聖母》をプライベート・コレクションより公開します。19世紀に活躍したフランスの巨匠アングルがダ・ヴィンチ作とした作品。個人蔵のため、専門家でも展観の機会が少ない貴重な1点です。

point 03

《モナ・リザ》の謎に迫る!

美術史上、最高傑作といわれる《モナ・リザ》。もう一つのダ・ヴィンチ作ともいわれた話題の《モナ・リザ》、衝撃の《裸のモナ・リザ》が日本初上陸。様々な「モナ・リザ」から名画の謎に迫ります。

point 04

ダ・ヴィンチの言葉から「美の理想」を探る

愛弟子が編集した「ウルビーノ稿本」をもとに17世紀に出版されたダ・ヴィンチの言葉を記した書籍『絵画論』を展示。ダ・ヴィンチの創作メモから、天才の「美の理想」を探ります。

比類なき描写力が生み出したダ・ヴィンチの美

様々な芸術が花開いた華やかなルネサンスの時代は、一方で、戦争の時代でもありました。男たちが強さや社会的権威を求められる中、女性たちは戦場に赴いたり、社会で厳しい状況に置かれている家族に対する憂いや哀しみを抱くことになります。時代を洞察する優れた眼を持つダ・ヴィンチは、こうした女性の内面を的確に作品に反映し、数々の名作を残しました。本展出品作の《ほつれ髪の女》(東京展のみ出品)、弟子との共作による《「紡錘の聖母」の習作》(静岡展全期間展示、福岡展期間限定展示)などに見られる、ダ・ヴィンチ特有の“憂いのある微笑み”は必見です。

また、ダ・ヴィンチが生きたルネサンス期のフィレンツェの工房では、衣のひだを素描する訓練が広く行われており、美しい衣紋を描くことは画家の力量を示すひとつのステータスでもありました。鋭い観察眼を持つダ・ヴィンチは、あたかもそこに人体があるかのように衣紋を描き、若いころから、その描写力は注目の的でした。本展ではその貴重な《衣紋の習作》のうち、日本初公開となる2点を紹介します。

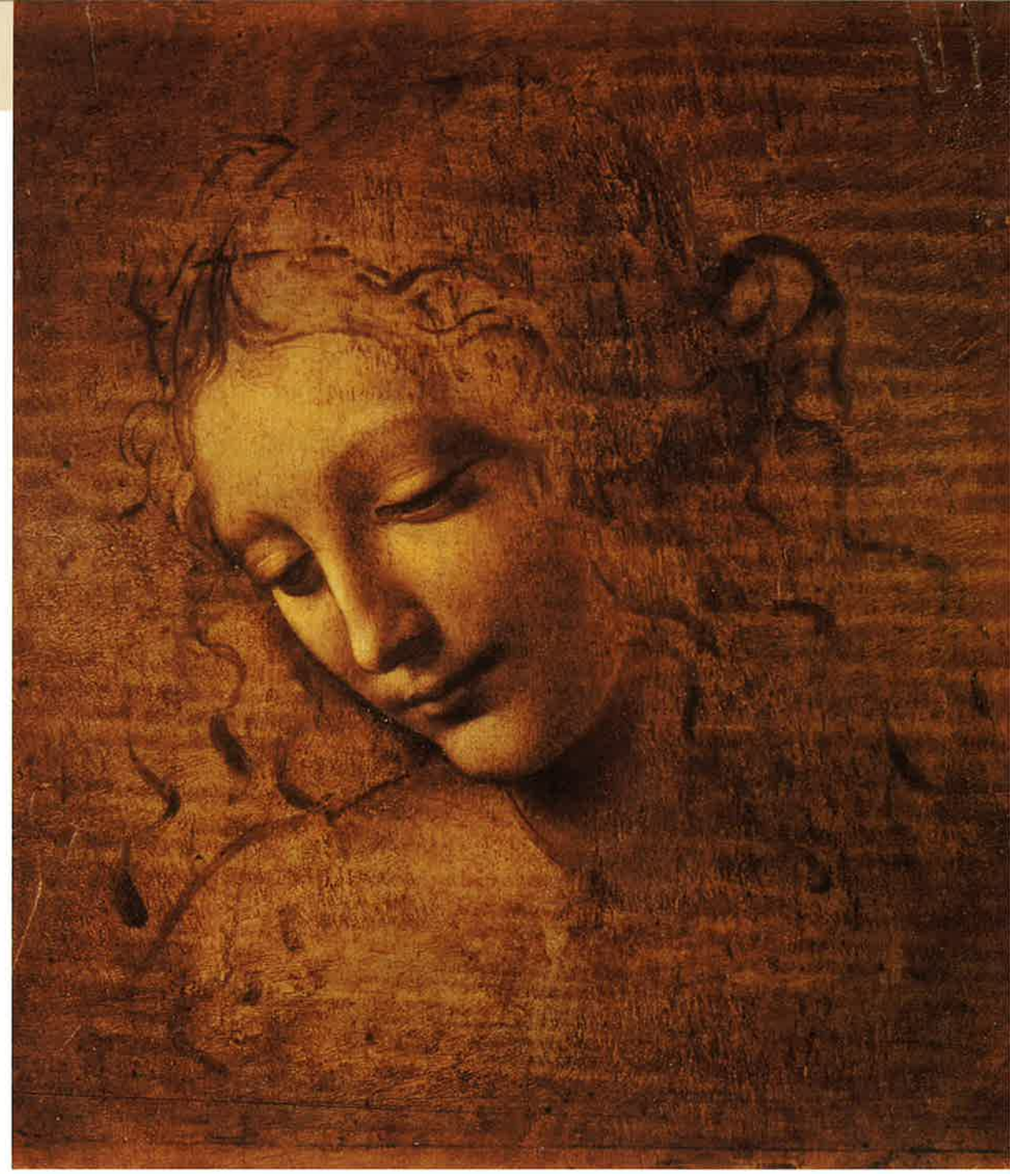
衣服はまさに
人がそれを
着ているかのように
描かなければならない

レオナルド・ダ・ヴィンチ『絵画論』より

No.1
レオナルド・ダ・ヴィンチ
衣紋(えもん)の習作
テンペラ、鉛白、亜麻布
1470–75年頃
28.8×18.1 cm
バーバラ・ピエセッカ・ジョンソン・コレクション財団
© Barbara Piasecka Johnson Collection Foundation

静岡展全期間展示
福岡展期間限定展示

No.2
レオナルド・ダ・ヴィンチと弟子
「紡錘(ぼうすい)の聖母」の習作
サンギーヌ、赤く地塗りをした紙
16世紀初頭
25.7×20.3 cm
ヴェネツィア、アカデミア美術館



東京展のみ出品

No.3
レオナルド・ダ・ヴィンチ
ほつれ髪の女
緑土、アンバー、鉛白、板
1506–08年頃
24.7×21 cm
パルマ国立美術館

人間のさまざまな美のうち、
道行く人をも引きとめるのは、
沢山の装飾品ではなく、
美しい容貌だということを
君は知らないのであろうか?

レオナルド・ダ・ヴィンチ『絵画論』より

福岡展・東京展
期間限定展示

No.4
レオナルド・ダ・ヴィンチと弟子
少女の頭部
(「紡錘の聖母」のバリエーション)
サンギーヌ、鉛白、赤く地塗りをした紙
1501年頃または1510年頃
22.2×17.5 cm
トリノ王立図書館

モナ・リザの謎

美術史上、最高傑作と讃えられるダ・ヴィンチの《モナ・リザ》(ルーヴル美術館蔵)。この作品には、制作年代や絵のモデル、注文主など、未だ解決されていない、いくつもの謎が存在します。

1517年、フランスで晩年のダ・ヴィンチに会ったアントニオ・デ・ベアティス(ダ・ヴィンチと親交のあった枢機卿ルイジ・ダラゴーナの秘書)は、著作『旅行記』の中で、ジュリアーノ・デ・メディチの注文で描かれた彼の愛人「フィレンツェのさる貴婦人の肖像」を見たと伝えています。一方、近年ドイツで発見された1503年のハイデルブルク文書には、「レオナルドが(フィレンツェ出身の)ジョコンド氏の妻リザの頭部を描いた」と記されていました。この1503年に描かれていたという頭部の絵と、1517年にデ・ベアティスが見た肖像画(現在ルーヴル美術館に所蔵される《モナ・リザ》がこれにあたるとされています)。これらが、同じ絵であるという説もあれば、異なる2点の《モナ・リザ》が存在するという説もあります。

No.5
アイルワースのモナ・リザ
油彩、キャンヴァス | 16世紀 (1503年?) | 84.5×65.7 cm | 個人蔵

本展では、多くの議論の中、「もうひとつの《モナ・リザ》ではないか」という説もある話題の作品を日本で初めて公開します。

また、上述のデ・ベアティスによる『旅行記』(ナポリ国立図書館蔵)も、貴重な同時代の資料として紹介します。

No.6
レオナルド・ダ・ヴィンチ構想/サライ(帰属)
裸のモナ・リザ
油彩、キャンヴァス | 16世紀 | 78×58 cm
レオナルド・ダ・ヴィンチ理想博物館寄託

「レオナルド派」の画家をはじめ複数の画家たちが描いた《裸のモナ・リザ》と呼ばれる作品が、素描を含め、世界に十数点現存しています。そのことから、未だ発見されていないダ・ヴィンチ本人作の《裸のモナ・リザ》の存在が推測されています。この上半身が裸の「モナ・リザ」の図像を、「ダ・ヴィンチ最後の偉大な絵画的発明」であると定義した学者もいます。

本展では、ダ・ヴィンチの愛弟子ジャン・ジャコモ・カプロッティ(通称サライ)が、師の構図に基づいて制作したとされる作品をはじめとする油彩4点の《裸のモナ・リザ》を紹介します。すべてが日本初公開です。

もうひとつの《岩窟の聖母》日本初公開

ダ・ヴィンチの代表作《岩窟の聖母》(1483–86年頃、ルーヴル美術館蔵)を原型とし、本展名誉監修者カルロ・ペドレッティが、ダ・ヴィンチと弟子による共同作品としている《岩窟の聖母》(個人蔵)を日本で初めて紹介します。フランスの巨匠アングル(1780–1867)が観てダ・ヴィンチ作と考えたという大変貴重な作品を、本展で心ゆくまでご鑑賞いただけます。

No.7
レオナルド・ダ・ヴィンチと弟子(名誉監修カルロ・ペドレッティ氏説)
岩窟の聖母
油彩、キャンヴァス | 1495–97年頃 | 154.5×122 cm | 個人蔵
© Private property in trust of The Pedretti Foundation, Los Angeles

ダ・ヴィンチが生きたルネサンス期の名画を堪能!

本展では、ダ・ヴィンチの弟子サライや、レオナルド派のジャンピエトリーノ、ダ・ヴィンチと同時代に活躍したラファエロ工房などの貴重な作品を公開し、ダ・ヴィンチが生きたルネサンス期の美の世界を紹介します。そのほとんどが日本初公開作品です。

No.8
ラファエロとその工房(帰属)
カーネーションの聖母
油彩、板 | 1506年頃 | 37.1×29.5 cm | ハンブルク、ハンス・ギャラリー

ダ・ヴィンチの言葉『絵画論』

ダ・ヴィンチは手稿と呼ばれる膨大なメモを残しました。一部を除きその大半は失われましたが、愛弟子メルツィが師の言葉を集めて編集した『ウルビーノ稿本』(ヴァチカン図書館蔵)の省略版が、17世紀以降『絵画論』として出版されました。そこには、ダ・ヴィンチの絵画に対する概念、画家になるための心得などが細かく記されています。本展では、1651年パリ版(フィレンツェ国立中央図書館蔵)を展示し、ダ・ヴィンチの言葉を紹介します。

レオナルド・ダ・ヴィンチ相関図

東京展期間限定展示

No.9

ヴェロッキオ(師匠)工房

ロレンツォ・ディ・クレディ

東京展のみ出品

No.10

同時代人

交流

- ボッティチェッリ
- ギルランダイオ
- ミケランジェロ
- ラファエロ
- ボッカッチョ・ボッカッチーノ
- ベルナルディーノ・リチニオ

父 セル・ピエロ ― 母 カテリーナ

※不出品

レオナルド・ダ・ヴィンチ

(1452–1519)

© Alinari. Licensed by AMF, Tokyo / DNPartcom

主な支援者

フィレンツェ

ジュリアーノ・デ・メディチ (1479–1516)

ローマ教皇レオ10世の弟。1513年にダ・ヴィンチをローマに招いた。

ミラノ

ルドヴィコ・スフォルツァ (1452–1508)

通称イル・モーロ。ミラノ公。ダ・ヴィンチは自薦状を出し、1482年から彼の宮廷に仕えた。

フランス

フランソワ1世 (1494–1547)

フランス国王。1516年にダ・ヴィンチをアンボワーズに招聘した。

弟子

サライ 本名ジャン・ジャコモ・カプロッティ (1480–1524)

1480年ミラノに生まれる。1490年に弟子兼下男としてレオナルドの工房に入り、モデルも務めた。30年近くレオナルドに仕え、ヴェネツィア、フィレンツェ、ローマ滞在にも従う。レオナルドの遺言で絵画作品とミラノの地所を相続する。その画業に関しては、詳細は不明ながら、没後に編まれた財産目録に《レダ》、《洗礼者ヨハネ》、《モナ・リザ》といった作品名が挙げられており、師の構想に基づく作品を描いていたとされる。

No.12

静岡展のみ出品

フランチェスコ・メルツィ (1491頃–1570)

有力貴族の子弟としてミラノに生まれる。1506年にレオナルド工房に入り、レオナルドのローマ滞在(1513年)、フランス滞在(1517年〜19年)にも随行する。1519年にレオナルドの遺言により、その手稿、素描、コレクションを相続する。ミラノ帰郷後、レオナルドの手稿の絵画に関する記述をまとめ『絵画論』を編纂した。出自から画業は趣味に留まったが、師の影響を強く受けた作品は19世紀まではレオナルドに帰属されていた。

ジャンピエトリーノ 本名ジョヴァン・ピエトロ・リッツォーリ (生没年不詳)

ミラノのレオナルド派画家。レオナルドがアトランティコ手稿でGioanpietroと記した画家とされ、1490年代後半にレオナルド工房に属していたと考えられている。1508年から49年までの間に契約などの記録が残る。レオナルド風の人物造形とコントラストのきつい明暗法を特徴とし、後期の作品にはマニエリスムの影響も見られる。ミラノとその周辺部で祭壇画を手がけたほか、1530年代には主に美術収集家のために《マグダラのマリア》、《レダ》、《クレオパトラ》など官能的な女性像を制作した。

No.13

No.11

レオナルド派

レオナルド・ダ・ヴィンチがミラノ時代に同地で開いた工房の弟子たちとその周辺の画家からなる流派。レオナルドが手稿で言及しているメルツィ、サライら工房の弟子あるいは助手であることが明らかな画家のほか、ジャンピエトリーノのようにレオナルドとの関係は定かではないが、彼の完成作や素描を模写し、その様式に倣った画家たちをも含む。1530年代までミラノとその周辺部の芸術界に影響を保つ。

No.9	No.10	No.11	No.12	No.13
ヴェロッキオの工房 (レオナルド・ダ・ヴィンチ?)	ボッカッチョ・ボッカッチーノ	レオナルド派	サライ(帰属)	ジャンピエトリーノ
「キリストの洗礼」の天使のための習作	ロマの少女	レダと白鳥	聖母子と聖アンナ	アレクサンドリアの聖女カテリーナ
銀筆、黄土と鉛白を用いた水彩、黄土色で彩色された紙 1470年以降	23.1×17.1 cm トリノ王立図書館	テンペラ、板 | 16世紀 115×86 cm ローマ、ボルゲーゼ美術館	油彩、板 | 1501–20年 99×72 cm フィレンツェ、ウフィツィ美術館	油彩、板 | 1530年頃 64×50 cm フィレンツェ、ウフィツィ美術館
テンペラ、板 | 1504–05年頃 24×19 cm フィレンツェ、ウフィツィ美術館	© Gabinetto Fotografico della S.S.P.S.A.E e per il Polo Museale della città di Firenze	© Alinari. Licensed by AMF, Tokyo / DNPartcom	© Gabinetto Fotografico della S.S.P.S.A.E e per il Polo Museale della città di Firenze	© Gabinetto Fotografico della S.S.P.S.A.E e per il Polo Museale della città di Firenze

《ヴィンチ村からの情景》 写真協力:イタリア政府観光局(ENIT)

レオナルド・ダ・ヴィンチは、優れた芸術家たちを数多く生みだすこととなったルネサンスの時代にあっても、特別に希有な芸術家であった。このように言うよりもむしろ、彼は、近代という時代における最も希有な一人の人間であったと言うべきであろう。哲学者テーヌは、レオナルドの作品のかたわらにあっては、ミケランジェロの人物たちもただの英雄的な競技者にすぎず、ラファエロの聖母たちも、その眠れる魂のついぞ生きることのなかった静かな子供たちにすぎないなどという意味の辛辣な言葉を記している。ミケランジェロもラファエロもともに天才的な芸術家だが、彼らは注文主たちの過酷な要求に深く悩まされるか、あるいは器用に対処するすべをもって身を労さねばならなかった。だが、レオナルド・ダ・ヴィンチのみは、いや芸術家のなかではおそらく建築家アルベルティと彼のみは、注文主という当時の権力からも超然としていたところに身をおいていたように見えている。これは彼らが彼らの信念によって自らの生活を様式化し、その様式の内にあって動じることがなかったからで、その信念こそ、ルネサンス時代にあって最も重要な概念となった人間の尊厳ということだったと思われる。

人間の尊厳とは、人間もまた神のごとく、彼自らの創造力によって自由に、文化を、宇宙を生みだすことができる、なかんずく彼自身という人格を創造することができるという信念である。これこそまさに、芸術というものが人間と同等に持ちうる意味であり力である。レオナルドの関心はひたすら、自由に創造的に生きること、そのなかで培われてゆく人間とはいかなる存在かという問いかけにおかれているように見える。ここから、「画家の科学(スキエンツァ)が神聖であるのは、彼の頭脳(メンテ)が神の頭脳に似たものとなるところにある」という彼の恐るべき記述があらわれる。これは決して人間の傲慢なのではなく、ルネサンス人の真摯な理想の表明である。この問いかけの深さこそが、彼が一人の人間を見るとき、その魂の奥底までを窺わなくてはすまない彼の頭脳の態度であり、30体をこす死体を解剖しなくては気がすまない彼の科学の探究である。一人の人間の成長は持続のなかにあり、人格の形成も終わりのない過程のなかにあるのであれば、そこに完結は見られない。そこには常に問いが残り、謎が残されるのである。

レオナルド・ダ・ヴィンチの弟子たち、《モナ・リザ》のモデルとなった女性、ミラノ公ルドヴィコ・スフォルツァ、二人のフランス王、これら多くの人々が、この人物を敬愛しつつそこに深い神秘を感じ、さらには、彼の作品に魅せられた無数の追従者たちが、彼の作品のなかに神秘を見てしまったのは、一人の人間が生きるということの永遠の謎が、レオナルド自身の謎とともに作品のなかにとどめられているからで、これは観るものの側からすれば当然の現象であったであろう。だが、この謎は永遠の問いかけであって、彼以来400年という、長い歴史の過程において無数の解答がよせられ、またこれからもよせられはするものの、完結と終わりということはないのである。人間の尊厳。この次元に、レオナルドの高い個性と深い普遍性とが輝きをはなっていた。

日本側監修:Bunkamuraザ・ミュージアム　プロデューサー　木島俊介

日本におけるイタリア 2011 ITALIA IN GIAPPONE

静岡展

会期	**2011年11月3日(木・祝) – 12月25日(日)** 月曜休館、10時 – 19時(展示室入場は閉館の30分前まで)
会場	**静岡市美術館**(静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3階、JR静岡駅から徒歩3分)
観覧料	一般1400(1200)円、大高生・70歳以上900(700)円、中学生以下無料 ※()内は前売および20名以上の団体料金 ※障害者手帳等をご持参の方および必要な介助者は無料
主催	静岡市、静岡市美術館 指定管理者(財)静岡市文化振興財団、 静岡新聞社・静岡放送、毎日新聞社
後援	静岡市教育委員会、静岡県教育委員会
静岡展特別協賛	セキスイハイム東海
お問い合せ	静岡市美術館　Tel.054-273-1515　http://www.shizubi.jp

福岡展

会期	**2012年1月5日(木) – 3月4日(日)** 月曜休館、※ただし1月9日(月・祝)は開館、10日(火)が休館 9時30分 – 17時30分(入館は閉館の30分前まで)
会場	**福岡市美術館**(福岡市中央区大濠公園1-6)
観覧料	一般1300(1100)円、大学・高校生1000(800)円、中学・小学生600(400)円 ※()内は前売および20名以上の団体料金
主催	福岡市美術館、毎日新聞社、RKB毎日放送
協力	東急ホテルズ
お問い合せ	毎日新聞福岡本部事業部　Tel.092-781-3636

東京展

会期	**2012年3月31日(土) – 6月10日(日)** 4月23日(月)のみ休館、10時 – 19時、 毎週金・土曜日は10時 – 21時(入館は各閉館の30分前まで)
会場	**Bunkamuraザ・ミュージアム**(東京都渋谷区道玄坂2-24-1)
入館料	一般1500(1300)円、大学・高校生1000(800)円、中学・小学生700(500)円 ※()内は前売および20名以上の団体料金
主催	Bunkamura、毎日新聞社、テレビ朝日
協力	東急ホテルズ
お問い合せ	ハローダイヤル　Tel.03-5777-8600　http://davinci2012.jp

3会場共通

後援	外務省、イタリア大使館、アメリカ合衆国大使館
協賛	損保ジャパン、大日本印刷、宝島社
協力	アリタリア-イタリア航空、日本航空
名誉監修	カルロ・ペドレッティ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校　アーマンド・ハマー・レオナルド・ダ・ヴィンチ研究所 所長)
監修	アレッサンドロ・ヴェッツォージ(レオナルド・ダ・ヴィンチ理想博物館 館長)
日本側監修	木島俊介(Bunkamuraザ・ミュージアム プロデューサー)

Leonardo da Vinci
e l'idea della bellezza

表紙上
レオナルド・ダ・ヴィンチ｜《ほつれ髪の女》（部分）
緑土、アンバー、鉛白、板｜1506–08年頃｜24.7×21 cm｜パルマ国立美術館

表紙下左
レオナルド・ダ・ヴィンチと弟子｜《「紡錘の聖母」の習作》（部分）
サンギーヌ、赤く地塗りをした紙｜16世紀初頭｜25.7×20.3 cm｜ヴェネツィア、アカデミア美術館

表紙下右
レオナルド・ダ・ヴィンチと弟子｜《少女の頭部（「紡錘の聖母」のバリエーション）》（部分）
サンギーヌ、鉛白、赤く地塗りをした紙｜1501年頃または1510年頃｜22.2×17.5 cm｜トリノ王立図書館

報道関係お問合わせ

「レオナルド・ダ・ヴィンチ美の理想」展　広報事務局
〒106–8611 東京都港区西麻布2–25–18
Tel:03–6826–8853　Fax:03–3499–0958
Email:davinci@ypcpr.com